「森三郎の作品を読む会」通信　第14号

2013年8月9日　発行
森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

7月の「森三郎の作品を読む会」では、「桶狭間の戦」（「赤い鳥」昭和7年6月号初出）を読みました。

これまで読んできた作品は何らかの翻案作品、あるいは翻訳と思われる作品が多く、タイトルの下に、（童話）（昔話）（伝説）などと記されていた。しかし、今回の「桶狭間の戦」は、初めて（歴史話）というジャンル分けがされている。

「赤い鳥」の目次を見ていると、他の作者の作品では、昭和6年10月号に片山寛二の「犬公方」が（歴史話）となっている例がある。（その号には、森三郎の名で「鐘（伝説）」が載っている。「読む会」では昨年12月に読み合わせをした）。

「桶狭間の戦」の話は、刈谷で生まれ育った森三郎にとっては、子どもの頃からよく聞いた話であったろう。「桶狭間」は刈谷からも近く、きっと学校の遠足でも行ったと思われる身近な場所である。この話が森三郎の初めての「歴史話」として取り上げられているところが、なかなか面白いと思う。

7月の「森三郎の作品を読む会」では、会員の水野日出夫さんが、作品の中の人物や地理を整理し話をしてくださった。そして「国史」でも習っていることをわざわざこのお話にした理由は何だろうかと問われた。それぞれがそこを考えることに意味があると、水野さんは続けられた。

水野さんの話は、「桶狭間の戦」と当時の刈谷城主の話へと広がり、集まったメンバーは楽しい一時を過ごした。

一時休刊後、昭和6年1月号から復刊した「赤い鳥」は、会員制で支えられていたという。「赤い鳥」購読者の小学校の教師は、新しい号が届くたびに教室で子どもたちにお話を読み聞かせていただろう。（下段に続く）

7月の「森三郎の作品を読む会」では、私たちメンバーは、期せずして、目をキラキラさせて先生の話を聞いていた当時の子どもたちと同じ思いを体験することができたということだろう。

「赤い鳥」読者について

森三郎が「赤い鳥」を創刊号から読み続けていた話は、「森三郎の作品を読む会」通信第13号でも触れたが、最近「赤い鳥」読者自身の記憶を書いた書物にであった。

古島敏雄著「社会を見る眼・歴史を見る眼」（２０００年９月発行・農山漁村文化協会）である。古島氏（１９１２～１９９５年）は森三郎さんより一歳年下で、長野県の今の飯田市の医者の家に生まれている。

「僕は大正七年の九月一日に小学校に入った。この年の七月か八月頃から『赤い鳥』が出るわけですが、どうも『赤い鳥』を第一号からとってくれていたようなんです。（中　略）そのすぐあとに『金の船』という、のちに『金の星』という題にかわる雑誌もとってくれたんじゃないですかね。それとならんでもう一つ、『童話』という子ども向けの雑誌が出るんだけど、これは小学校の同級生で新聞記者の息子がとっていて、お互いに読んでしまうと本を交換した。その当時の児童雑誌は全部一生懸命に読んで、三年生くらいになると『赤い鳥』の作文の投書欄に投書をしたこともあるんです。」

森三郎さんと同じような体験をしていた子どもがいること、そして「赤い鳥」の読者層はどういう人かという例証にもなる興味深い資料だと思う。

次回予定　平成25年9月13日（金）午後1時～3時

「ちゑの小法師」（「赤い鳥」昭和7年7月号初出
森三郎童話選集「かささぎ物語」所収）

「坂本龍馬」（「赤い鳥」昭和7年7月号初出）